

空想先生

空想先生

武者小路實篤

昭和二十八年十一月一日印刷 昭和二十八年十一月五日發行

著者武者小路實篤 發行者河出孝雄東京都千代田區神田小川町

三ノ八 印刷者山田一雄東京都青梅市根ヶ布三八五 印刷所株

式會社精興社東京都青梅市根ヶ布三八五 發行所株式會社河出

書房東京都千代田區神田小川町三ノ八 特製定價參百八拾圓

空想先生

自序

自分ではまだ老人の部類に入つてゐないつもりであるが、ものをよく忘れる點では老人以上で、同時にいろいろのことに鈍感になつたのも事實で、若い時のことを思ふと、つまらないことによくもあんなに神経をつかつたものだと思ふ。このごろは仕事をしてゐる時だけは一心になれるが、すむと勝手に忘れてしまふ。何をかいたか完全に忘れ、他人に言はれてさうだつたかと思ふ。この調子でゆくとどんなことになるか、何にも氣にもならず、心配もなく、生きてゐるのも死んでゐるのも同じやうないゝ氣になれるかと思ふ。萬事僕は恵まれて、今程心うれしい時はないやうな氣になつてゐる。少なくとも健康な時は。

さう言ふ氣持だから本を出すことも、出したいと言はれるから出す氣になり、のせるものも萬事信用する友に任せて、僕は何がのるか、題を見せられてもはつ切りは覺えてゐない。かく時はたしかに、その材料で許す限り自分の心を働かしてかくが、あとは忘れてゐる。つまらぬものを書いたやうな氣がする時がない

でもない、時々我ながら調子が出たと思ふ時もあるが、いつもさううまくはない氣がして、たのんだ人に氣の毒な氣がすることも皆無ではない。

こゝにのせたものはどの部に屬するか自分にはわからない。この頃僕のことを愛讀してくれる人がわりに多いのには感謝してゐるが、自分にそれだけの値打があるかどうかは、友人と出版に關係する人に任せて、自分はのん氣にして居ようと思ふ。

しかし長年の經驗が一點に集中される事、その時頭に自づと浮ぶものを一心にかくことは好きである。何か生きてゐる感じがする、内から充實した氣持になれる。他にまじり物が入る必要のないのを自分では喜んでゐる。

昭和二十八年十月秋晴の日

武者小路實篤

目 次

自序

罪の子

三

自然讃美者

二四

死んだ男

七九

美神とその忠僕

一〇三

大愛

一三四

泰山の結婚

一四九

玄妙

一八二

拾ふ神

一九五

空想先生

二〇八

空
想
先
生

罪の子

一

之も山谷五兵衛の話。

僕は山谷五兵衛の話を信用してゐないが、しかしつくり話だと思へばいゝと思つて聞いてゐる。實際、彼は話を面白くする爲には、黒を白とも言ひ兼ねない男である。いつか僕は彼と一緒にある老畫家の展覧會を見に行つたことがある。あまり面白い畫ではなかつた。彼もあまり賞めて居なかつた。たゞ其處に一人で隅に腰かけてゐた、その畫をかいたらしい老畫家の貧しさと、その孤獨らしい寂しい表情に同情してゐた。するとそれから一と月程たつて僕の處に来て、彼がすま

して饒舌るのを聞いてゐると、僕が一緒に見に行つたことを忘れてしまつて、し切りとその老人の個展の畫が面白かつたことをしやべり、その畫が皆賣れてしまつたなどと平氣でしやべる男である。空想と現實がごつちやになつてゐる内に、段々事實が變形され、小説化されてゆく、その内にその小説を現實以上の事實のやうに思ひ込むらしい。だから彼の話は、事實と空想の區別がまるでつかなくなり、事實が空想になり、空想が事實になる。だからいかにも本當らしく話すことが、實はまるで空想の世界の話になるのである。

僕は又それを思實に話す男ではないので、話はますますこんがらかるわけだが、僕はその内から、自己流に話を始めるわけである。

だから之から話す話も、何處まで本當か、何處から嘘か、僕自身知らないのである。

僕の處にも近頃いろいろの人が来る。その内に一人、感じのいい、詩人がゐる。

齡は二十七八、眉目秀麗と言ひたい男で、何處か寂しい男で、僕の妻に特に氣に入つてゐる若者だ。小説もかいてゐるらしいが、僕はあまり讀んでゐないが、流行作家とまでゆかないが、妻などは愛讀してゐて、有望だと言つてゐる。僕も逢つた感じに、何處か冷い處があり、へんに自信家の處があるが、悪い感じは持つてゐない、頭も悪くない。

お父さんと言ふ人は大變有名な教育家だと言ふ噂だが、僕のことだから名を聞いても、よくわからない。ある人に話したら、有名な評判のいい、教育家で、相當な學校の校長だと言ふことだ。

僕の處にくる青年は森方昌一と言ふ名だ。僕の處にくるやうになつて、四五年になるだらう。どう言ふきつかけで僕の處に来るやうになつたかわからない。來たてはよく父の話なぞしてゐたが、あまり賞めても居なかつた。父は僕より弟の方を愛してゐるらしいのです、なぞと言つたこともあつたと思ふが、別に記憶し

てゐるやうな話は覺えてゐない。その時分はわりに快活な男だったが、一年程前から急に表情が變り、寂しさが身についてゐるやうな感じがし、急に無口になつた。失戀でもしたのだらうと僕が言つたら、妻はあんな人を失戀さす女の氣が知れないと言つてゐた。そして或日ふいに、姪をあの人にもらつてもらうことにしたらどうだと言つた。

僕の妻の妹の娘で、出來のいゝ子で、僕の姪の内では一番の美人でもあり、性質もよかつた。森方とも僕の家で逢つたこともある。妻はその姪、敏子が森方を好いてゐる、森方の方でも嫌つてはゐないやうだと言つた。しかし僕は森方の家がちやんとした家ださうだから、僕のやうなくだらない男の姪をもらつてくれと一寸言へないと言つたら、妻は私から話してもいゝ、あなたさへ反對でなければと言ふ。中々自信のありさうな様子だ。

それで僕は斷られてもいゝなら話したらいゝだらう。だが斷る方も斷られる方も、こたはらないやうに話をしなければいけないと言つたら、妻はそんなことは

百も承知だと言つた。

それから間もなく、妻は僕の留守に森方が來た時その話を森方に話をしたらしい。森方は「考へさしてほしい」と言つて歸つた。満更望みがなくもなさうだと言つた。僕はあてにはしなかつた。

處がそれから四五日たつて森方から長い長い手紙が來た。僕はそれを讀んで驚いたのである。

三

「この手紙は甚だ不愉快な處があり、先生御夫婦に與へる感じがどのやうなものであるか、僕にはわからないのです。ですけど僕は僕を信用して下さる先生方をあざむくわけには參りません。いつか先生は僕の父が有名な教育家だと言ふことを知つてゐる、君はその父の名を恥づかしめてはいけなと言ふやうなことをおつしやりました。當時僕も父の名を恥づかしめないやうに心がけて居た時で、

先生の御言葉を素直に受けとり、父の息子であることを名譽にしてゐました。私は幸ひ學校の成績も悪くなく、大學もわりにいゝ成績で出ました。私は父の息子として立派に生長し、父も母も喜んでゐてくれると思ひました。他の人も父にいい息子さんが居てお仕合せだと言つてゐるのを何度もきゝ、その度に僕は内心鼻をたかくしたわけです。

處が良縁があり、私もその結婚に賛成しました時、母一人その縁談にのり氣になれないらしく、何か母は決心し兼ねるやうでした。その理由が僕にははつきりのみ込めなかつたのですが、何か母に恐ろしい祕密があるのではないかと感じないわけにゆかなくなつて來ました。僕はそれ迄にも、時々、わけのわからない不安に打たれたことはありました。しかしその都度、僕はそれを打ちつけて來ました。それは、之からあとのことは、絶對祕密にお願ひします。他の人には知られたくない事實なのです。最初に思ひ切つて申し上げます。私は父の子ではないのです。當時、父が母以外の女に夢中になつてゐました。そして母が自暴自棄な氣